

久しぶりの「京都研究会」

4日14時から京都西院の会議室で、宮本憲一先生とゼミ生らによる研究会があった。前回は3月20日であり、コロナ禍の緊急事態宣言により中止が続いたので、久しぶりの研究会となった。4ヶ月ぶりに宮本先生にお会いでき、何だかほっとした。研究会のメインテーマは昨年9月に有斐閣から出版された『現代社会資本論』。

まず、編者の一人である森裕之さんが、本書の問題意識と構成、現代社会資本論の課題、社会資本の老朽化について、ビジュアルな資料により報告した。浜松市などの社会資本再編の事例から、現代社会資本をめぐる地域と自治体、財政問題について、多くの示唆を得た。現代社会資本論の課題は多岐にわたる。

次に、私が社会資本研究と『現代社会資本論』について報告した。このレジュメは1月16日の研究会のために準備していたものだ。2018年12月26日の国家経済研究会で報告し、途中からメンバーに加わり、第2章「社会資本と地域」はじめに、社会資本と都市、東京問題について執筆したことなどを話した。あとから宮本先生などから、コメントをお聴きしたかったので、パワーポイントで東京一極集中と人口減少時代の都市社会資本の課題などを駆け足で説明した。写真2枚は森さんの投稿から、お借りした。

休憩のあと、宮本先生が本書についてコメントした。現代社会資本論をどのように構成するか。1967年に刊行した『社会資本論』を踏まえて、現代的な課題にどうアプローチするか。序章にも書いたが、現在の日本の公私両部門を含む、広義の社会資本のストック量の統計はない。1967年当時は公共部門が中心であり、行政投資で分析ができた。統計上の制約もあり、本書では住宅や交通など社会資本の分野ごとに、公私両部門から現代社会資本を分析した。国際的、学際的な視点が重要性を増している。本書は政治経済学から現代社会資本論の課題に迫るもので、長年にわたる国家経済研究会の共同研究の成果であり、多くの人に読んでもらいたい。

研究会では会場だけでなく、ズームでも多くの参加者があった。有斐閣の編集担当者にも参加していただき、本書は好評であり、テキストとしても活用されている、などとコメントされた。私も京都大で本書をテキストにして、対面講義することになっており、研究会の報告・質疑も踏まえて奮闘努力したい。

宮本先生からは、「仁和寺の原風景を維持しよう」という報告もあった。京都の文化政策、歴史的文化財としての議論が呼びかけられた。またレポートで紹介しよう。



(2021年7月6日)